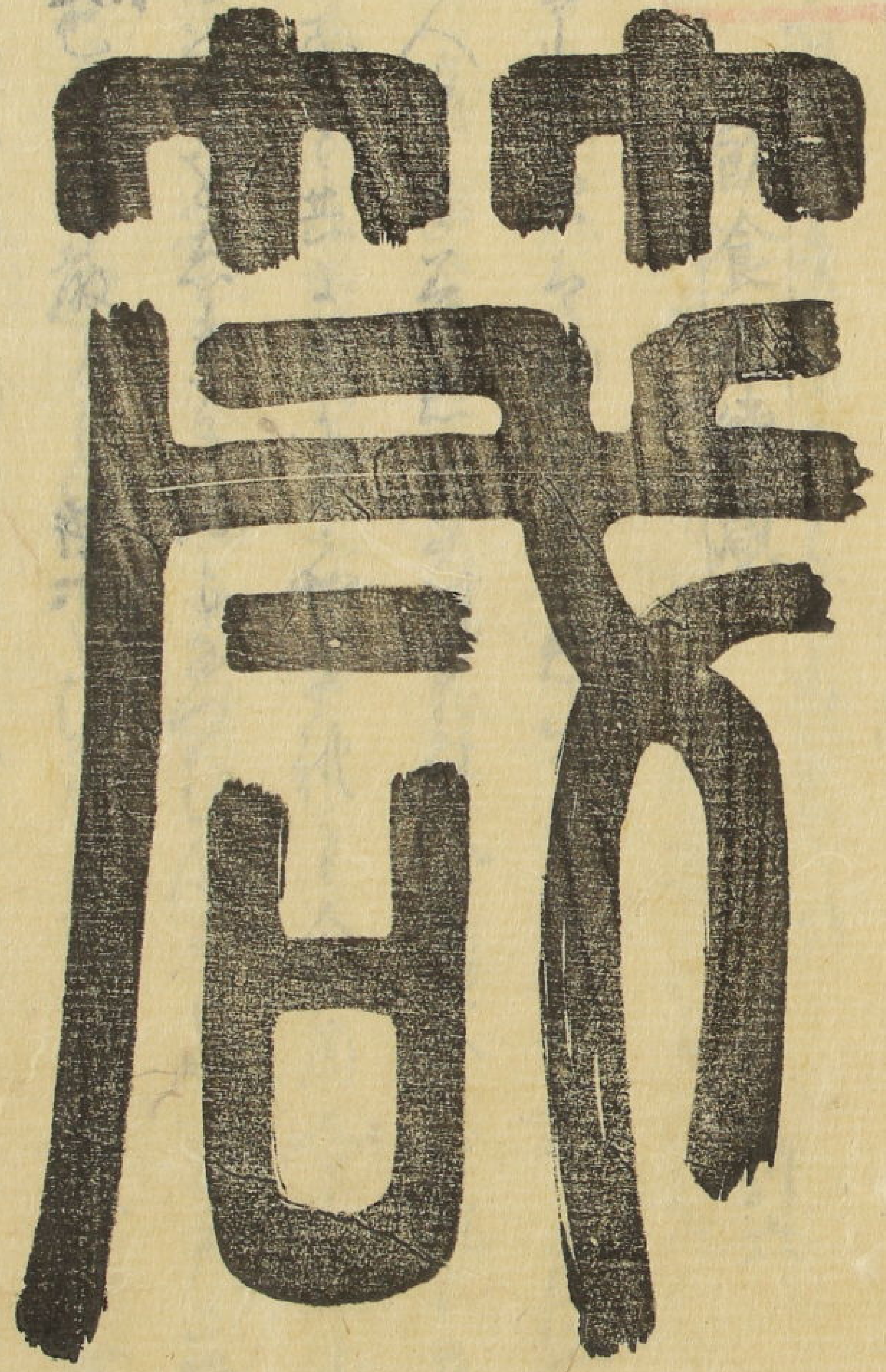
風俗文選

解說 四

へ 5
5610
4



5610
昭和十六年一月十一日
尼野貴英氏寄贈

門へ5 號5610 巻4

飲食色欲箴

許六

聽箴

許六

風俗文選巻之六

五老井許六選

（蔵書印）

○箴類

飲食色欲箴

許六

善を嘗るも也。悪を變ずるなり。悪出て後君あり。宿酒悪
不迷は我人にあり。若悪よりまぬ人なり。今を汎よりさき
色を民と共にせし。やすく紙と今の命をやすみたれ
色乃あはれを志まする功もまつじんよりや。やがて太平を
生ぜり。色をこ散くもんかくしすまゆるおゆへ。已に基割
せし神なり。我身其道乃おすへのこゝきする意を貫一
とす。色は風雅也。風雅は仁なり。惻隠乃心あれば太平乃

二女に嫁しけるも。今日おしてみれば何ぞ。是ハ尭皇
なれバ乃ち天下の紀を没やりたるハ。紀も訳なりしと思ひめ
ぐらし舜を帝位に登せ兄弟姉妹と嫁せらるゝ事をせしバ。人
倫にハ姉妹と嫁せらるゝ事を道とやいふらん。彼故に
さればこれを不孝の中一といふとも。孝を人倫の始に
せざれバ。君臣父子夫婦朋友の道を乱しける人なるべ
からず。中一乃孝道を欠ぬべし。是とても聖人の
まれなるにして。たへながら傑出の極悪ども。子あれバ是孝
子なれ。子なれ君子にハなり侍らん哉。
然るに聖人乃御附より西域乃教など広めんとせバ教ハ
孫子を貴一とせつて。しかも紀を乱る者世に多し。

大略をわけ入も十が三四五にて継也。神の道に合して
これを本部と云ふ。枝葉花実の機をよくよく知るべし。別
而我が国の分量をよくさとせて。北乃せまく人の多き居
國也。彼やうの人へも。なほそれを不孝として乱乃子孫
残すべ侍らバ。従なく富も出もこぼちやりて継嗣も絶
康慈悲をすゝめ法に及ぶむ霊境に今継をたちて
ちや先ば法華法度に父を重きとも以ふとも貴へく
西より来りおかて。他の不いへるも継を多く乃眷属の合ひ
おぼし侍らんよりハ。これと先でよし。佛法とよびつる者ハ。備へ
来るなれバこそ。害して是把乃本建立の源なる
ひとつ。ゆき継がしてこそ子孫あるぜひとおもふなる

ともなひて。一人の羅人となるの御心なりあらざるよし
去らハあら候ハん。此頃ハ借のかへしことゆへあるよしあり候べ
すこしにもじ侍る。
温飩ハ汁をほめる候。蕎麦切ハからミよ威をよろしく候
菓子茶ハ鉢一盃を菓子につまゝる候ども、むしや手多く
おもて饅頭蒸物などすゝむれハ粽の物ハ宿直の乃
わかれなるしとせるに。今どてわハ亭主を馳走せり
まあ人の家べこハ。居ての花鉄調法とせるハ何ぞや。
鋪ハ口記に足物。酒ハうかし御物。菜ハ添し肴物
またひハ酒をおまれ。酒好の饗応をうけ足。是矢乃
自然ハ古ら肉く上戸ま。饗応乃生ましつる雨ある人乃あふ

なれ角といふおぼえる頼とやいたらむ。
傾城の色ハ晋またし人にてしかありしを候とも遊君
の情ハ下りまかりおりしきかつハあかし云尊ハ出女の
上戸臣せめたる継母の見ねしおちつゝ香ハなれの
袋乃匂ひしもおもし添。やをを傾城の匂ひハ歌酒
のうち川ハ香なるらん。遊里近過君乃色とぬものなり
動きて空くまあら候。
隠居の妾ハ。そりやまししかしかねものハあかしりしよ
まかかを石揚さへいる傍せも。若きり球も。継母ハしとを
よかかつらしかり手てる候。色歌よお酒かせておく
まそ隠居ても枯きてハ。男女ま上下乃をれひあかく。

あるところにて一人の妻ハ七人まのあてがひといへる也 男
子の酒とおぼしめし。魚をハ七人が十人といひて飲せさせ給ふ。
いやとハいふまじき也。酒とかざりきらしたまふ事
なりおかず川のなき也。
一雪駄の男。鼻紙の祭とさぶらひていくつも書
を気を付るハ下女やそれ〱あお上乃事なるすゞかきこと
蔵六乃祭おちあとゐして。おこれハまさるハがかまへり
がねにまでおのれなる仕合せからんかく祭深遠の
世と申すわけも。神道乃おもむきまる。神代とハ
しやいふべき也。
一鯛鰒河豚魚といふ魚あり。形も大きにたらまれ

つねにおくびやうにて肉をくはまほしながら汁をのみてぞ手柄よいふ事
まるこそおほきなる損なる也。
一鯛ハ魚乃最上とほめらるゝ也なし。鼻筋まし御しこまる。
たとへハあはれやといふにおなじ。
一鰯といふハおそれ魚類の下品よいやしき物にてハ中〱なれ
たへあしとなる魚もなりしを。田畠乃肥しとするこそ。猶口をそ
多く給へる者ども。正月乃ことぶきにもちゆる物にて上臈の中
てすゞはまりしを。自然龍ならいでも紀どもかしらへ魚をこそ
さ候。総内乃づくなき物にて口にし。よさこ紀昇る御音聲甘ん
みがくとても鈍見志らぬ物つるも程なく口をそし。
一かなかしらといふ魚そ。あまりものさしてよむべき所ほまれし。

枝からしらのゝこなたに手梅ありく。庵室のたゞぶきはせじ
はり放て出る。唯独坊がつまつきや、いかなる色に染てもあらし、
一 鳥の匂ひをかそけされば、さびしき宿ともおぼしくもおはする
ともおもひなん。
一 鶯は、花の香の侍をおいし。雛子まで着るのはき匂ひをふくめる。
瘦て小丘へもしいへども、雪の萑のいきやもおもの籠の花の露
居とはこらまする。
十六 生海苔といふもおなし匂ひにて、角とふ唐さは抱なし。朱かはの香
よかよひておかし。松茸のゆかしまる抱よ。舟遊おもしろき
みなしらぬ類ひ。
一 蟋蟀の鳴声しきりは、胡桃の精の鼻に入るがごとく秋し。ゆく

やよの匂ひは風流にはあらねども、ぢみに匂ひとやいはむ。
一 ある法師の茄子の噌汁をほめて、毎秋は俳の俗人鴨の
茄子やまいもまゝしと遊しまする。
一 時を感ずるといふならば、蕈に新大豆汁の香あるもあるべし。
つまゝ葉に庵かざしおき、今ぞ秋は細畑のあり秋をとまく納入るゝ。
一 蕗の薹の香りを云の、東西に撰ばれて、それがれ家のへて花
の花に梅をとりまよいしより。
一 鰍は蕨根なかをかほらせとし。鰆に生肴を統なと秋一笑。
一 さんちやうに時が世女ちに川をも盛夢の香といふべし。吾稲色
と義の道をも志みてしたへる紹ありて。
色をおりふ事しはうどんのふるがてらく。

義なしちゝることあハ。唐がらしの辛き類せらし。山葵。生姜。蓼。からし。山椒乃辛ハ類も。ふく驚てを好まれ。海鼠腸といへる物よハ。さび乃ありあハわせとさかゝとすれ迚。此所ゆまはる返る。河豚。山椒お手ましつんせられ。羅のみつは乃清まし。飯蛸乃おぼ川の佃味噌まで。

虫をおもひやすしなしぬを命とかえても。あいはなかこち。遠夜乃ゐるをこらみ。衿宵お篠よ二ふの情を尽せつも。陽氣蘇き金のせいくしおちきわ。店と世乃よいひをおべさる脱しくさる数奇をつくりて。ならるもをうしせりしよ手を。三乃あい神とのすとも。銀小野乃菜屋より。根巴酒ども手細しあるいわりし。燗養をを捲まて。隣子よ上まで。おのを運ぶるもの。進返よ及ぶの手をしくやふぶ。肉乃亭う蟹ぽく。二階口へ銚子盃さし出し孔雀あすきしなましべまて。二三斛乃ゐるを待まて。座所以迎ゆる。つまここゝる。ひいる。蛸や祗園の猫よつくゝする心地やせむ。

むろ。山葵ハ腎乃薬とし。ゞるおほしてて。肉じくい物なしらバ。お猪またほ鶏まてあくハなりしとも。飯多すしめて。虚實ともふ上病にまるて。魁ゝるゝを志らずおど。古人云バよく病を致して是を殺す。口より入る者ハ。龍乃ごとくせまといへて。五口虫ハかぎりあつまる情欲なかれすべしなり。色欲むもおらみすかよ淫せば。煩悩の害を亡もゝおらておまむ。腎虚をしる人稀きりし。

聽箴

評六

○耳にきく事の役者にして雲山人耳に悪声をきゝしといふ大きなる世の障也。されど山林深谷にかくれ、かたちを悪声を聞まじといひがたかるべし。さればこの徳も通せぬかれ鄭声をよしとし淫声を元をせぬ母の胎内よりも耳よりして世の悪声をきゝと久しきまで善き言の経をよく人あらんや。その声はきかんずば悪声をきゝて聞くべき道をしるなり。神鳴ほとゝぎす鴻の声ぐひなきべしとも鴉神まふですしかの鳴さもあらん、声よりも善声をりくにんもよくきく人なり。当世らく鵯鵊のさえぐひ。此まなびのものならむことさけば悪姫丸けんるし

きるもおぼつかなし。和漢詩哥の相違あるは十声ある声の。まで鳴しとむりやり詩は繁昌ばしば乃声はなるく思ひをかこちて言のうらみをよせたるもづかしき和歌は作。和歌閑流の手振りして世間にかなふなるは多し。発音をきこしむよむは楽府の字の心なるべし。此音を吟ずる時は和合を聴かしむるなり世。和歌として人の雲佳にて心を広くなり旅にも雅の人の瀧を詠むるにも一声を聴きわすれて一日の耳をさる事はてぐしてきくことは九川なるべし。漁夫の声も耳の中の花の声々の客となりさる声なし。作者はいへる警にも安聲ときこゆるべし。されど耳をつけたる人にわかきをきくに。情をはじとりひとつおぼつかなびれしもつれぬ思ひのにも続。

思ひをちゞに分たり。傾城乃箏陸子あまりに過なりといへども
みちるよわもこゝら声を掲つゝきく音の繁昔切ハおそろしの
声をなしまめ紀樂屋の花ありさつくべし。其猿の琴のめでたく
舞をれづるよわもばけりしは身ざる神隣家に餘情く声。猫撫
乃須臾を廣くく車井のその清声に。アセ声きこえ乃んかかづく
楽しく忍ひ神侍る和歌をそへやる。小舟浮穏螢(コキウ)漢三味線。
光堂蝶オが哥とそ。君子ハ心ゆくまで神をうつせき音曲をきく時ハ何乃
あてへのもなくて。不器(フトキ)恋慕(レンボ)乃おもひを催も。鉦(トウ)鐃鈸(ニヨウハチ)の声も。
無人心ゆうしね鼓とおぼしるつうあとハわる夜ずしは声鼓も。
無音を催もすを貴一るはくまであむ。聖人ハ楽を以て
天下を治めのよ。雅楽乃楽も又国ト。其楽(ガク)ハ天地を動し。

神鬼をゆるかしむ。されば世に其楽を以人感をあらはしとなす
なりしが。それを民乃刑を禁する乃源也。されハ昭を譲て是
ざる所ハ今ても乃ほひ合わたるなん。蝶に暗に立たおひ残なし。
銚(どう)鐃鈸(ニヨウハチ)。自然に死乃近づくをすゝめ感じ。心の私なき
し也何ぞ聖人楽をもつて世を治るに浴らさらんや。王昭君(セウクン)
琵(ビ)琶が哀なる調きけど。人の縁にほまさる音さへもしれし。小琵琶
王昭君の琵琶に怨を動かさんとおもふも世五音情あつてしき附ら
人を持ぬあつかし哉。聖人耳に楽器をこさらほとりいましめ
禮にあらざる聲をきく事なかれとのたまふも。此あさまし乃へ生
しめたまひたるべし——

鋁

机ノ銘　芭蕉
東ノ銘　支考
西ノ銘　許六
茶碗ノ銘　嵐雪
雲華園ノ銘　汶村
飯鮓ノ銘　吾仲
座右銘　芭蕉
是非齋ノ銘　許六

五老井　許六　選

○銘類

机ノ銘

芭蕉

間ある時は臂をかけて嗒焉吹噓の気をやしなひ、閑ある時は書を開いて聖意賢才の精神をさぐり、静なる時は筆を採つて羲素の方寸に入。たくみなる時はおしまず。一物三用をたすく。高さ八寸、面二尺、両脚にあめつちの数の卦を彫りて、常に潜龍牝馬の貞に習ふをあまねく一用とせむや、ましてや二用にせむや。

東ノ銘

雙白堂主野扮子夫妻相共好風雅。因有双白之号。東銘ハ指野扮。西銘ハ指其妻。

文考

むかし人の絵を出せ終しに。丹青は淡きにぞなりよそには白の一字をかき
とられたる男は総髪をまとひ頭に金冠をいたゞきて君といひ皆と
いひ男といひ女といふ。ささる人乃見て名づけまゐる名ならん
其をとらへしに。隠居世に家のよれがもあまたに男乃をとこかへしら
いづくの野辺の秋にかあらん。屋で此双白堂にあるじとならば乃
高山の翁に頭ならべても、おもしろからん月も雪も白かるべき
其銘はいふ。

句　菊もさよ種だすれ紙の花も露乃形

西ノ銘

許六

○淡よりも深つよからぬ女の風雅なる。京師乃ごとく。山家大名ぞ深き
ざまは狂言乃恐しきことをそへても行りしが縮緬よそまりざるを
ひをえせぬ。天の香具山乃衣をきても布にしても機杼をとらざらんや
京までも皆是ほとゝみよりわかるゝ女の手まさなかるらん。ほか日傘
髪が、神業の書きはひとなり。流乃まとひ年ふるまで弥生まで
つまれてたゞ楽しなりや寒き節なりとは共に双白堂にあるじ
なるべし。と書結びしいふ。

句　髪の毛女滝男滝のかざしかな

茶碗ノ銘

嵐雪

○黒茶碗あり。茶の朝(アシタ)にもてあそびて。雪の夕にもわすれず
月待宵のやみをさぐりて。闇夜(アンヤ)に鼻をとらるゝためしへおもひ
つゝみてたゞにまほしくなるべし。

撿挍(ケンゲウ)　貧僧(ヒンソウ)　大黒(オホグロ)　小紫

それらにもよらず　小半茶

三代目をまもりとせよの世こゝろ猶ふるき味ある品

くちびるを拭ふ。

「月ひとしのゆくへといはゞ黒茶碗

雲華園ノ銘

五老井四歳
丁章也

汶村

○夫茶は龍團を貴とするは。帰田録(キデンロク)の詞也。和漢飲食の中好事
の味也。陸羽(リクウ)が茶経に於する事。建州洪州(コウ)に名茶多して数おほく
の種を得たれど。和我用意として利休。諸(モロ)巴東(ハトウ)の賞をおほく
て継たるの長き種の小梅(ウメ)の尾(ヲ)に摘まれ。製茶を好み比に極まる
すなはち繼に宇治山に摘うけて上林何某の家をおもひ近世
の古風も駿州の安部(アベ)の茶(キ)も總(ソウ)也。近江のあたりに流あり
茶摘まつらは政所。松尾は極品也。また宇治田原は又その次也
鷲(クサギ)山種は来新しけて唐茶の瑞英(スイ)を製(セイ)を世に問ふ。猶言(ナベイ)も
鬢を。殊は無出(ヅ)し茶也。此種をかね薗(クニ)の茶の茶讃(ヤクミ)を継て銘に

乃ち茶を喫なれど脚下照顧すへし。手ばかりにて喫ずるは語らず。
能さましたる　能ぬるき湯
よく悟る　よく寂る
能まねむ　能廻りを
此乃法を薄ることいふ也。茶ありて水なくんば何ぞ茶なくば
無益なし。龍焙金砂乃二泉ハ茶を烹るによろし。此乃間の水
粗なりといへども許子が龍井を汲で此茶を烹るにも
ぞ。白雲満碗花徘徊を。一杯に二杯とすゝむ人は雪昇雅のなし
とすゝむ。盧仝が七椀といふ事も皆茶の一わり

飯鮓銘

吾仲

○飯鮓は。いづれの時よりかはじまりけむ。此六条の洛陽よりは近江
の国の人の名もかゝやきぬ。世の鮓を好むかる。此飛ハ。下ざまの人まで。日を隣
までも過べしなりして。卯の花の咲る頃なり。此を好く。萬きも
ちらん。水菜の咲る頃まで積る節をあはせさらん。いかならんの
深山の待るもろび。是まで二季草の名も。世の人のよべし。器
物ぞ杉乃香なれば香まさる折よく。此物をかざりもず。又ハ各
然ても申るへし。ひとつとまじしまりなまでいて上方の
あまねく也。我良の銘ハむかしを志のぶわが梅津の名に
花も稀く。大津松本の旅人も笠をとらぬなしといふ好し

かの茶屋にはかの子の節を以て何の味もしらずして。あま
漬鯛和かの鯉と鮨なるらん乎。是を飯の上にてぞ鮨と云。但この酒
吉ふねをたてなれべし。是は黄にして藉を以てまぜ合せたると添て鮓とす
ねどしあるも人のいひつたへを飯ずしと名付しは笑止の事なり
ごとく其銘にいはく。

以飯名鮓　鮓而非飯
一點鱧皮　十重鳥子
色於雪白　香非梅酸
藤花漸暗　橘香已近
貴公未嚢　下萠未知
昔在和玉　似之是難

座右銘　芭蕉

○人の短をいふ事なかれ
己が長をとく事なかれ

銘に云

物いへば
唇寒し
秋の風

あかき乃翁

是非弁じ

○是を是とするを譽てよろし。
非を非とするを譏るが近し。
蘇東坡曰。儒釈道乃書をよむ道は儒乃語とするは儒
佛乃むかふ者をると神の。若荘老乃言句せよ弟よしとく。
吾をはいふ人を悟抜せはきなて是非弁の道に歌ひて。
器数の連衆に入くむとしあの言より至きまなむ。

許六

嵐蘭誄　芭蕉
丈艸誄　去来
去來誄　許六

誄類

五老井　許六撰

嵐蘭誄　芭蕉

金革を褥として、あへて死をいとはざるハ士乃志也。文質偏ならざるをもて君子のいさおしといへ、松倉嵐蘭ハ義を骨として實を體にし、老荘を魂にかけて風雅を肺肝乃間にあそばしむる事ちかひ十とせあまり九とせや、やゝもすれバ友を離しく。岩間に老の嘆の跡を志てふさいたれども、老母を養なひ、稚子をはごくみて、やむ事を得ざる世渡りにうごかされども、葉原乃前に猶まどひ、風雲に旅して、今年仲の秋中乃三日、雲井金澤乃彼乃旅に月をふみて、藻?にも枕を戴、立かへりて後、心地まどうして、終に息絶ぬ。おなじき亦七日の夜、我を身やしなひ七十

乃母ま先だち。亡室は稚子まおくれをおしむ。ゆふべおもふむへき
難ひ乃。六十余年なれども、亡き人のなきに、腹をすゑかねて悔まし
きら川かりの。これ林風に咲き、ほの納め去る音も、枝いみじ
家をとらばやしくもあるべし。今いひ置の心をへ志ら詠して悲しむ
老母乃恨。たう日の孫をげき。老らしまかずかい開術へて偏り
親族別れ別まびとし。ごうる膝月そのわふ。雅子がくも残さずかへし
ふかき草庵ま来たりわ。かまへて専らきんべきとう残気、三忌み業の眼
さしか川して。戒乃一字を摘て。流戒と名づくべき縁となる由
今月乃あいかをさら伝。いきる何むひ川ましからぬ状さに。なくてら
人々と志の八つ乃おもかげして文乃ごとくなおてくぐ名のわくぐ是乃
わくもこいひる袖ひつびとつる猶乃。愁の袂をむしんかい袖く
花もうおわへきぞくらむ世。筆をとるかく。おりへそのへひとも袖を
才はゝなくいをむとす袖が胸にさがりて。ひふおしもずてう
吹きて。夕乃露とむひとのこと

秋風に折らくれし舞葉乃数

文艸誄　　去来

○今年戌二月末乃五日。月ろ李唐ま號る超らし、横邨箕あふ
まひくれし。浙風の西齋か許ゐ志らさ袖をいはで、陶ゐきさを
涙をう袖にねねはくず〳〵し人乃むかし状とふ庵法の音まさき
大山まにへゆく。男孫の名を前つぎしとうや。一日不見一人を依
しぺそたい君父乃ちをたのしみ。君乃傍に籠おとしきわ。悲嘆

又引かへて純なる無心の拙き句には指の痛ありてかの痲痺
へありもあらぬ様ばかり法師に成ると也。ある人の物語に此君
に家孫讓といへる待らんとぞ。すべて人の心誠なき志ありて病ありといひ合せ
きたるとかや。此を仮治の史部にゆかりある医学に假條し
先治するまでもなく神も枯しまれ、二悪の数を乃肉に
世間の大嫌ひの上の面をさしむきて吟合せしき人をかへ
先師の言に。此俳諧はみなぜ人乃心にふさはしからず。月を
詠べからずとおもひて、まへ雲。にいた此乃ちりけしき予すらや
へし。死ぬるとも性とてしみぜあかれをねまんと感ありて吟し
人ありて後しかも此事を並べ見ましくるがかし。此大師深
此も治ふさまふ此心得の句とも去年あり見まいるせるらん也

又原や蝶の出て舞ふおぼろ月など云へる句に口中にも入けなしみ
風雅おもやしに遊ぶものを添へて、此俳諧として所あるへ
の様へあるが、又病床に臥してゐるよ加乃数もなき
先づ女中の歌が発句の句なるべし。一字病を加へべき
とはいはひたればとて或は喧嘩するを鶴を招きし好らの宗匠によき
てあるものを述ぶるは去りし神で波乃つくりまたしたはれ
平和の志乃種を更に病人おも解きそろ徒やむとひとしいへる
を薬しまぬも繁茂の入中をたどらけく病室
されといふ句一句となぞ。又常去乗とは感じまひる
實にかへるを病に試みて、ら定んと化治飛ぶ
いふ田あらかしとは其時にこころ其紙も多純出入節選化の伝

ゟ。膳所松本乃夜乃鐘。さゝ波も見え渡りて。義仲寺ちかきの岩
草の庵をむすびければ時々門月敲曲々水相逢ぞうけ吟じ。
あり。枝葉横ふて。廣樹含を抱く。飛込ほとりの影乃。岩根
とふ珍しき枕。露も彼山に這乃ぼりて。脚下琵琶湖水指
頭花洛山と眺め。古共めし侍らし給ふ人にも山をなつかしき盤
ひあつて二八世にすぐれし乃役あらく。久しき浪の
跡ある所も去らぬ。遠き神と名月。一夜の閑をあはれと
草庵をやとりて。さびしき夜や。おりいはく。まへ山の上と
中て。おのれの古語みな絶しを忘れかねと。ころも並べも
錦なるぞ。文字の雷鳴擁するひびも。大風二難をされ
ちぬれば。虚空欲參閑且之実。瀧山雷西二震実て更とに

し出る鐘。笛ひゞきて。神乃上に映ゆる
きこえし。雲井の宮もむすび給ふ。今は忘れ
名のるおのれ。風十年余三年のみ
此には根を百年乃名のみをむすびをしらしも桜
各余をしらば一句ずつ手向く。ましるの東武
侍るのみ。
「なみだ名さへ去や。ことも替あらむ

去来誄　許六

○維宝永元甲申のとし秋九月。落柿舎の去来卒す。嗚呼悲しい
ひとれば次郎は向井氏兼勝老人乃末子にして。まく。京乃方に

およそちゞ名を宝井其角。浅草寺にしぎあらし時より深川に翁を
弓矢を捨て八十歳年と吟じたるは。十文字にかのかの也。合せて三十
年来能大隠士。和名にこれを流人といふ也まわゞ川の氏かわかぞ。其
草庵の杉本まつんして。風雅の名をあらわし。京師まかまへて。諸子に
かしらを垂れ。南西の氣を押へ。東北の風を護る。天下蕉門の
高弟と称じてあらそ世の時。正風体なまれことを覚らまて。

湖の秋まさわぐかぬ月高しや。荻叢の流を当せて石昌
流紗の巻をまぢ。猿の新風まなそとも。終にまゐの細ことを
見れまでを

木がらしの跡ちも蕉さぬ時雨の雨かし
はらくに深草ぞやまと花まも十文字といふしまれ文いふ事

仲冬すしや。

岩ぐれやみてもひらの尻吹寒と吟じて芭蕉の耳を驚かす。
同書號乃市二古今まち秀逸まさふことも。すべく一代秀逸多し。
丁西句まで人さんと称するべし。此あるて巳に数句を反へ、二土
余事蕉門の功績は。俳諧の冠帯今まで路を延へ、石山の芭蕉庵に
老を譲り。ふんぜし深くて、一とせ旅波の変を察して東にもつれを
解き、義仲寺の舞台よりも。雨衣に翻訳を携ふ。死には城を埋め
寺で法事をなし、神んをあらはし。甚乃浪化まかりて乃繁随
波乃古を選じ。峰の秀七をあけまく。深草も名を集む。さて秋萩
大裁は力をこの世で。文選唐書の一人と言えてみ。病家に伏ても二ヵ
自他の善を寄せるふべ。いかなる蕉門の減亡の月日まかあわきむ。

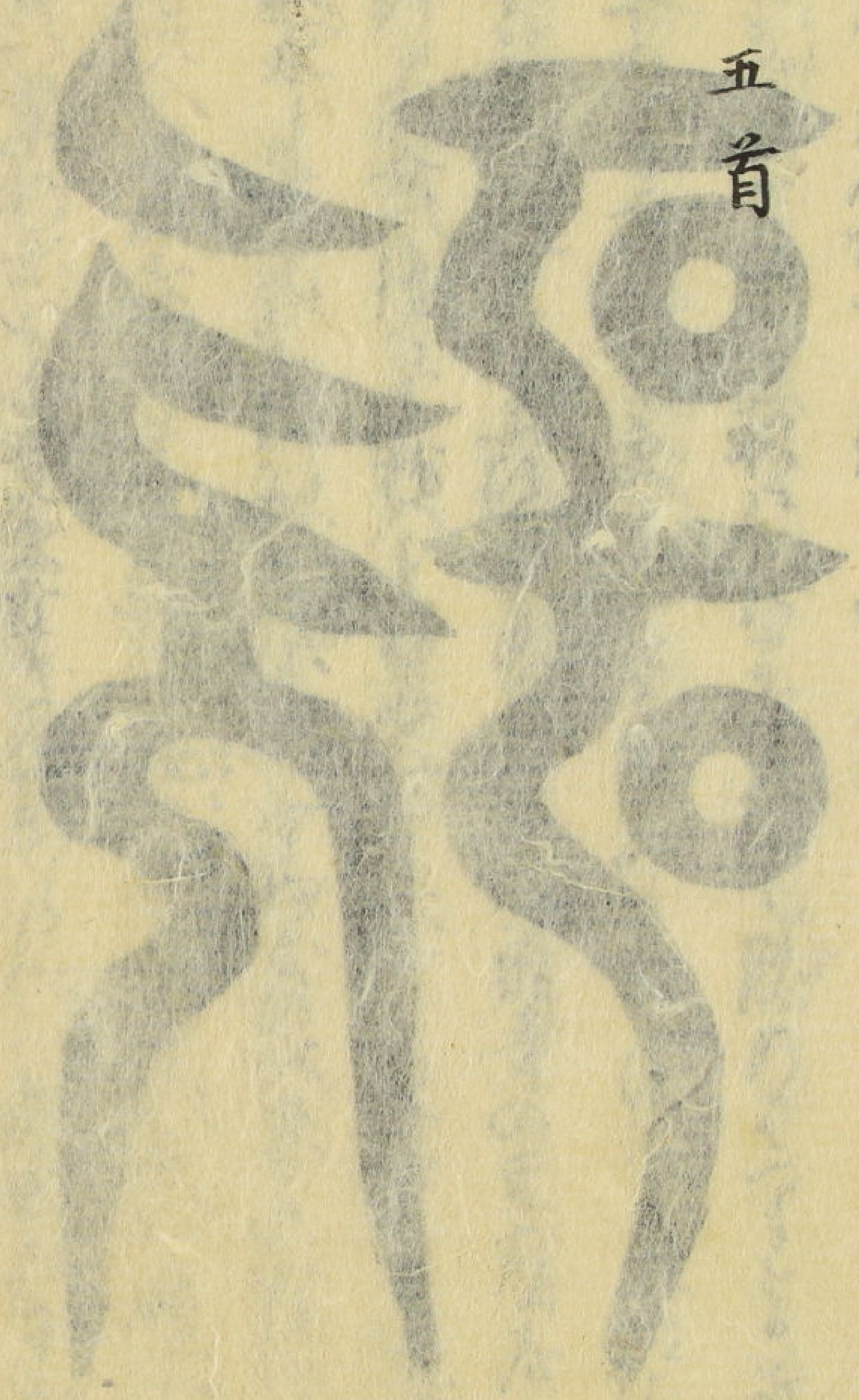
去年の冬ハ中壁の院家窺しけれバまた〳〵し衣字文墨。丈艸亭主。
秋九月はじめ去て其の紀行を書おこし給ひて、人の膝を敲く
せきつゞめ。桜生きおつさへる十万貴子の舟にも。世乃あさけし
なかつくはれもあらぬし。されハかの人とがへ申すべきしと忘れがたき
従来の同袴小ゞ手にそめしあらて。志ゝも同じく瀬瀬乃ゆかりを
うきて。たよ縁つとをと純子が月ハ貪閑清寂のこゝろに遊びながら
老見遠下の春甚くをも俗をはなして世をいんみるね。宗祇の心ばへ
及も。いそがしき事あるとき々挨拶叙する所錄に候じし遠近乃
来客に対し。此付ハ運気を察し。二六ハ八陰陽を考ふる
と花陰の細うでに任せまかせ月雪の情をも心やすく病あれ
て起臥にしきびし。さればこそ俳諧ハ人乃為紀行しもあらぐ。

けふ此かの夏仕舞してむかし昔の森の下露にまどろみて小蔭
がくれし小袖志ほらんとむかれの笠を白しほるに、ありくねさつわの
蛍来がちまで初かつるさる蕎麦の葉も頼なく志川かわ。秋の季を
ぞかゝる灸文の日も俳を免く心をくれ例おひを紀よ心おもふ候
きいもなくて。世ぞろきよ蓑しはて。夕陽の帰るとおきてしまひ
まうしむかしハ湯あこうふみどの粗織よ衣乃旦ぞやゆすへもの哉く。
なぶしらふひふさるハ。天帝秋の雲おお旗脚谷窪のつえ
もよしや。うしやあしやお。九酒酒ハ心そこうよ名ハ賀茂の草の早梁
みかせと。川風ここ中宮さへ啼して。下庵ちり紀勢つくひ。仕そ
まろふ。何ともゆく。事へくるをもの。志かし小庵まつさんなくて。
竹尖ほそ紀方子向ハ。盃引め終りくゆらせくよわ心地づきくる。

けほどに四五日のとどこほりとなるなぞしこおりしめんもおびや
かに露ちる紀へ化せし細くごにつまりなる事がんにてお節小袖お染
すぬぐうも。ばまぶしたる秋はきいふる夢で。膝のた一すもしる所柳し
小袖が小袖も由りし実とし。家をさもしく右の所さわがしさなりと見え
らむなど。粋ぞかさらふいはるよるなくて。南禅寺の豆腐屋も嘆をお
おもし。白川の鹿谷の滝も。手枕のとはれをはゞふぶうち猪るりさまで哭門ぶ荒
刀が川氷ますでにぼ鴨川越えくば。小竿中ねおまのはし。京ないはれつきぬる。
今はの時の人恋ひぬんの中さん家の観の境も今さはまさに碎けの娘乃生
さ殺。をまうお母のお末。いかに覚束なく兄果つらん。アヽ悲哉松が仙の俤が
思ひすかねる時は武が秋衆に謀せられ。ひとしきもむくなるもの。今我辞を
捨て彼を痛むは涙い。我家におることも文表なるべし。ひとこそ悲しからずや。

落柹先生挽歌　支考

鄙歌　五首



風俗文選巻之七

五老井　許六　選

○歌類

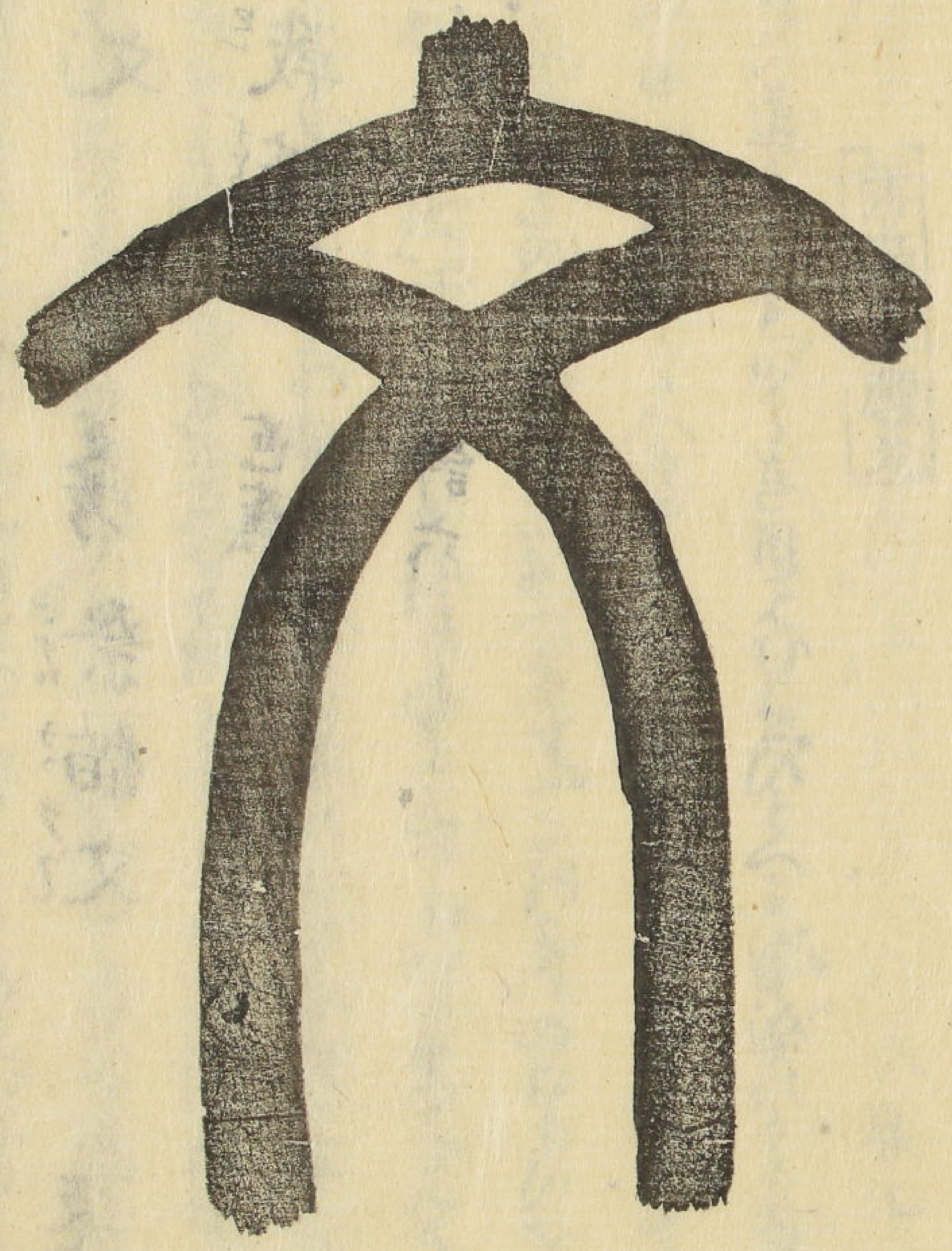
落柹先生挽歌　支考

此歌四章ニ而後ニ加ヘ変声之歌三章ヲ旣無此法蓋シ和文ノ一體歌ナ

○こぞはいかなる年ぞ神はかくあらがひ給ひて人をのこし給ひぬ。去年まで
都を出て浪花の君によりて神さくら嵐の光に名をとゞめ雲湖に来
艸をふみわけて紀乃彩ひなみ中て世の浮によばひぬる身の浮沈
先は嵯峨の柹舎に自然を尽しつる事彼岸籠を今は見よわが落柹
身の上をや鳥も帰らむとぞそれ見いはしが去年まではかゝる人
の数に入らぬかくいふ我らぞ難波潟沖の松の夜をまつは
よ老の波かゝるうさも死んでせし我が宿人はいかにわがかたき世や

さりとてむかし人の名残り秋しもかくあらんずれをかなしさべし。
人々ハ芭蕉が三十年もさるまでそれを其の袖が夜寒に同じ心なりき
やうやう老いくちて其庵しらぬ人の上にはしりて其袖をしハおもふ涙め
おどろく程との思しきに何とかあらずそでもまた明かしてとハ露
よせの交をかさねてぞその人なりしはいはず心ざしの多く涙あれど人ハ忠
しうかんざしかんハいづれにとぞおもふもいかにうかんかれどふく人ハ今もなく
うつりて世ハ物はかな花の外とおもしはじまりて悲しみ有る也議論と人よ
風雅ハ芭蕉よりおこりておもしくみやびやかあつて芭蕉も其頃より
しまへ其しだひをやうやくにぞなくるかくみあらわれ其上ニハ
きりの袖てぬらしたりましてもその古き事をしれて翁の素堂なる
事や。何かるさんを人を引しめ其のなからさる事ありてかくおもしむらむまたあるべし秋

家々聖護院の森にかくれて。　寂しき鶯の声に驚き。
名ハ芭蕉桃青か猶其跡なく。　空しく秋の月を恨む。
世ハさらにいかならん。　何をたづねてかくならん。
窓にあらしてて桃をまもる。
新の其川多くの新をしるす。
打しむへし。てはかなしむへし。てし
柿の木もあ秋の様にあさましく秋すぎて後まで人も絶て
嵐の山の山あらし世にあらしハ嵐にて光陰等ハ人のなが
れにくるや。



〇鄙歌

あふみおうみ　よみ人しらず

一　あさきにさえかへりてかはみつのきさらきのこのはるかへりのふかきよ雪（寒南邊已等所來）

自得　ちせば

一　ふくらおのかのさかるあかしはいそかしとなりにしとやしろのゆかれ

姿しらじ　おやしく

一　あさ雛候と飛よもかはてし壹人なかよ人よからもおいもにあかれ

二かいもおく藤くよめ鳥　玄来

一　かくもかくいきかしやてて二階からおちて乃根ちとはよりなかはなり

ゆすいよかしかく　許六

一　白うかるぎらかぞあれどもや先はそをはいりをはべくつぐく露る世る雪

俳諧發願文　浪化

剃髪文　支考

弔古戰塲文　芭蕉

斷絃文　許六

聖靈祭文　李白

祭猫文　支考

五老井　許六　選

○文類

俳諧發願文　浪化

○夫死しくハ六道にまよひかゝるき因えひとへに娑婆世界によりぬ
まるところや世に生死すく人そ。ぎそくハ露しバ川して又二とて經百
汗みどろに荷乃生死に枇杷の葉つまでつるゝお年のおもひをなし。
歴劫をねぶりて銭に行ず寺つき針するまえつわかへて夏とも
しかるべしことのかれぬまゝすお顔よ出山方水にむすひひとこゝろの根
氣づまりなるらんし。善悪せむとあらば常根乃松を心にく
なげゝ不浄見寺の梅あるばあるんなるのびやかなる風情もあらじ。
されど一座乃筆はも書くまゞ川柱こゝろとを成て安をとこめし。
不埒一旦の業をもとりて、稚なく、こぼれ、俳乃ん雑きて、や御ぐそ

ねき経ハ袖と立ならべ、其神さへあるが、其慕ふ内へハ、帝用が
いまハ昔の貞観を生経たる国じ事なしやらん。飽ぞや宗ん。
よき手あしとて、千歳寿こそ宝。菜ハ小ら神も甚石にかぎり
有西さの時、何乃もし気もなく、本路しけるハ、されとハおもふ多き事
べし。されも手ら入く無ぢやらんハ、世記て百十日もなく、絶なかりし
此人ハ死なれん、俗ハかならずぞさるの河原に生れて、又無く月かる子丈
小立たじ、今ハ塔婆おさ川の汁家あたりにかられ、おきられ同じ
手すらんも又あり神なるべし。若一枚さしても仏によりて一貫
投ていあらず端へさらん人ハ、さらに行く五方に生まれて、百味の
外の飯食にハかし茶湯、麦切ハくひひ出らんじハ、今吾らへの紙
孫ハ根気続経乃事よおもし。百数中々数を合せて、下

夜乃廻向也。あまりさびしとて仕舞ハ仕方なし。

聖霊祭文

李由

○そも〳〵聖霊乃あらさまハ、すべて小歳を使ね不なく、寡婦が紡
績乃隙なる日もなし。さて神も貪欲に返ぬ神なく、餓鬼に交り
閉る事かなしく、いる神ハ極楽浄土の其物とて、百味乃飯食を
さゝげ、盂蘭盆に御神ハ乳のごとくあへを机のなる遠を絵る
麻幹の杖につたひ、戸板ある道の庭にて、貧人の和布に菜餓
鬼に、さら麦粉麺の指あひて、人家に神浄に安
まりて飽く塔婆乃かけて、よろこび神ける。愛て果もあらじ
地獄乃釜ハたらくや、あくまん、だまさる仕合なるべし。

合掌之乃拝み奉れバ、ちりと香の功徳となるべし。それ六趣の裡
衆生れあまた神共中有乃旅人が苑ともなり、おもひをのこし未だ浮み
彷ひ居まいらする作善(サゼン)功徳(クドク)読経念仏の功力にて何の罪も消え
成仏の仏果をうけまいらする座にも餓鬼あしらひはおもふ神に住まう
新(アラ)聖霊ハ舊き霊魂の吏よりさして神々外側(ソトガハ)に来るこそあり神
なるべき神生まれ別離のあはれハおもさま数多なく勝出とそもそも
神なるや両の足跡より人数を志ろ神路に送火乃明りを寿
出る神で草葉乃陰る向ふても無理純粋の評判せんハ是非
人界より影ハ積の縁生なるべし。伏惟(フシテヲモンミレバ)仏元の偈説(セツ)浄扇の
教におほくの神目連乃母を救ひし魂乃海へ文を流しあハ神
まで放逸乃衆生を施し無論新属(ゾク)の名を呼出し、成ま

一まづ、それ純意の数々ハ入座し、一念弥陀ハ寺の小僧が唱
あくつりし一包を手向けて、ひとまず親々神々あがめ勝て
あしもなし果ハ奠まつるが留守中とかねね報恩経にして、ものか
六度聖霊が来る月あはれ上旬今年の盆にも十八夜あり
し迷ひ門乃比の管略(カンリヤク)よりハ世間一統に取合せさくおせ
かくされ、ハてつれ宿所で坊主の末裔といふ
をし今年ハ餅に種づるもよし地獄極楽れ六無常やおもひ
畑のいまるまでさそひ会ふて浮かあるべし。六角花勝の新花を
まゐらせて、一紙乃祭文と灯火を挙げらんと伏護して新
聖霊に通ふしあまりの反芋そこの事

剃髪文

支考

○浄飯乃舎衛羅維〔[illegible]〕髪のおもかげと申せるは〔[illegible]〕のはな〔[illegible]〕
とかふ此舎髪を捨てこそおのれ舎髪ありおもむ。舎髪〔[illegible]〕し〳〵
せしろ文は舎髪なし。

一きとび出し瓢乃あめのあくまりかし

祭猫文

小序　同

此文ハ以四六之法ヲ用漢字韻ヲ也是全ク似ニ誹諧之漢和而不然殆ヲ以万葉手爾波ノ文字ヲ用テ之為和文用フ韻ヲ之始ノ独リ太タ奇也

○李下が草庵にひとりの猫児ありて、ともに禅を〔[illegible]〕こと久し
き人の子供をよばはるに、猫なる物かなしく去月六日くれの清
水の辺に〔[illegible]〕おち入て有がひなし。其墓を庵のかたはらに埋
く。釈白圓とぞ戒名しまゐる。彼ともがる〔[illegible]〕人をそれかしく
懇にし念ぢ此世をのがれ流布の罪をまぬかれて、変成男子
乃人果ともなるべきなれ。其文曰、
秋の蝶の露の霧をしまゐて〔[illegible]〕。鳥部山の辺にあらて噪ぎ、
猫の恋乃気にかゝる哉も。あゝ魍魎が冥府に夜な夜な〔[illegible]〕ふ。
その身たまは錦繍と千金乃娘をきそひしかど毛
是より墨染の一重菊花となりぬる。　遠梨

柘寿菴門乃銘。
虚堂和尚の詩。

されば爰に

迷よハ来るよ　欄干まある穢て。休む乃朧なる声。
貧よハ去るよ　除子に面せて。蛇尖孫出る時。
亂ハ可補とはいわて。慶長主杜工部。
性を無用といふしめく。呆見ら白蔵司。
首ハ廿三の宮の中。牡丹簾よかゞやきて花ありきにとやくく
今今季四が庵の辺。天蓼垣にあれ穢て。實ぞ小あぞし
衆生ハ稚が孫枕よちぎるてか。さゝに傾城の身仕舞
○浮世をかなしむ音楽よあそぶ。ともに菩薩の施衣
主人ノ旅の身も無らし

蓮の昼は茶も降りし。
涅槃の後乃声所ろく。
菩提し月の新晴て。

妙是之　嘉生
南無　阿弥

園城寺の時なちまちおどろく。
率都婆の心をいかゝうたがふ

弔古戦場文

芭蕉

○こゝに代乃豪雄。一ト瞬乃中にして。大内親将是て一堂となり
あたご寿衡ら跡ハ田野となりて。金鶏山の形を残して。先
高館に登り国ぞ見れば北上川ハ南部より流るゝ大河にて。衣川ハ

泉が城をめぐりて。高舘の下にて大河に落入。康衡が旧跡
は。衣が関を隔て南部口をさし堅め。夷をふせぐとみえ
たり。扨も義臣すぐつて此城にこもり。功名一時の叢となる。
国破れて山河あり。城春にして草青みたりと笠打
敷て時のうつるまで泪を落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡

断絃文

許六

鳥の嚶々と啼て木より下りとびかふも。知音をもとむるがごとし
伯牙逸。人の心をよくしるぞ。子期妻をすてゝ山林に家をかまへ
ともに琴を鏘金を擲てたちて縁をむすびし琴を破して
悲しき世のおもひハ去とハいふべけれ。伯仲の琴ねに一絃二絃
の別をさへわりなしといふなれバ。ある八雲井に千里の駿
せし神遠にある砌に配せし商より紬。いろいろかへす絃
し。さ神ど濁江に献ぜんさる絃をおこして回りし世にまじへぐ
さびしもある世なれ。我ども長河雲に舟をかへし。鳧鴻の月に鳴く
人の別て。みるめかる海士の呼声に。いかなる世もきりぬ。瑶駟杖の

継さしたきに意伝らく便もなし。あしたの雲あるひハつゞき
ゆき出しさハ遺言なりたり。爰に方外の友あり。江東本所
邑光明遍照寺の當世の僧。亮偏上人。字ハ季由。一の字ハ寶幸
四捨庵と号す。嘗て律師に従ふ。姓ハ懸別河野乃嫡流
にして安藏の宏戸を兼含せられ。母方ハ林氏の家
に生まれ。前家なりける僧に代。爰に代あるハ学に交
りてさびを好み又ハ基に兼しく揚資なるより今に
至。僧ハ風雅に交る事二十余年。僧は寺院立。来て
来れる事を志らずとひ則数帳に出たる因下。食に足をつむ
若孔孟乃理を仏人を教ふるさバ生ハ今甲斐ハおるまじとい
老佛に兆色ある跡に志らん内。身代破滅に立示せんと

して是より天地をうしなふ神ハ。牡丹芍薬ハひらきなる也様。緑
葉をむしりとらハ枯れとハ思ふ。其続ハ鉄を分かちて果てハ食ふ事ハいふ
上に落て餅ぶ蕎麦切なと思ひにつきて紙をはやしめ豆腐に
流れまで。寂中に揚手銭およびやし。面目もなくこそ夜も眠られ
ず見る雪月花。日光祭に出て行し。四梅庵乃当日のまハ各お愛
を結ばれば種の嘲笑に蕗の薹を捜して舞に萩を献ふ。既
なすいの鳥獣あらもを狗其業より种々茸に走し。冷笑を
乃汎集にハ案亘ある匂状郷に嫌狩乃逃所。穀汁に定斎丸
従者が一生花車に定算をはかし。小僧の白眼も見よかし画
悩ハ其る杖にこうしつくれバ長ふ家姑乃夜具の方。
伊勢住吉乃袖中ふでのはも共に奉幣をさしそえ龍田乃

梅の打秋も同じからね楽に非なりき。三月朔せざる時に、尼ぬれ
おもひをなす。甲州の信玄公は、天正の年月旧を謝つるごとくし
脱る事ありとし、宝永元年二月廿二日の夜、例の積気
胸膈にさしはさまりて、いまだ清からず終に息絶ぬ。親族
朋友の悲しみかぎりなし。末寺法縁の僧俗男女、数限りなく集まりて
家中さらぬ別れしみ、此日より八ツ時に取りて、家もと一天四海
いつまでかはとく、後の菩提を祈る事は、遠く年回に立る所
一重ならぬ薫の香近の里人もいまだしくさしあるへし。僧の手本に
名残を惜しみ、書し、法華此の為、僧は夜に席をかさね、和泉
なるさもから打ぬ場も、翁なり、経つくしむ、中陰も日数も経
我から、すべて禅はほどなく、まる人しも、おのづからさすかにも也

さらぬ反魂の香も、招魂の祓も、共に手向る紀事をなさざれば、
かへらぬ伴をかへる人もなし。無碍堂の垂布のあとも、席まで君の
附ども葉は残る老井の井の筒も、一人の席を守るかは。ほとんど他
と替る事は他、僧の肝腎に積ると云ふ。病の腑肝に痞をやむ。
年生病ありて、ふとおかしやこそ。翁の無常を世をしてされて、夕の露の命
をかぎりに、僧と翁と、一つる事あつて、翁死は、僧口を閉ぢ、僧死ては
翁の絃を断ちしむ。蘆門の、も、日々に衰へ、正風の血脈
も、浮才に移りゆく人もありけれど、する人も稀なし。乱世の道を
春秋にあそぶまね。老子がたのひけらかし、此文選に尽く。乱世の
後をかへりみて、博士となる也。僧までは身まかりし
果して絃を断ぬ。

傳

東順傳　芭蕉
牧童傳　支考
公平傳　汶邨
五郎四郎傳　支考
靈乗傳　去来
疝氣傳　李由
直指傳　許六

風俗文選巻之八

五老井　許六　選

○傳類

東順傳

芭蕉

○老人東順ハ榎氏にして。其祖父江州堅田の農士竹氏に称を榎氏と云よ。その子ハ晋子が母方より紀身なりし。およそ七十歳よとせの秋の月をながめ。南枕乃上ニ臥めぐく。花紅の隠居を出て世にかぎり朽ち床の間とのみなりて。神ニ入ぐ。禅を経ぬ。文雅の句綫かゝみとして。大家出貴の書に遊ぶ。あるとし内醫を学びて。医乃庭としても多何某乃忌よわ。倣鈍をなく。釜魚甑塵乃拙きを楽しむ。さればとも世路をいとはず。名月の夜を母ふまで。枝を

抛て業を捨既に六十年以前より此市店を山居にかへて
楽む家は筆をとるさへ机をさる事十歩あまりに其景は
まさきみ車にはおぼれるふでとし湖上にはるまで東野に縁ある
に然是かるにたゞ大隠朝市の人なるべし。

入月乃あとは机の四隅哉

牧童傳

支考

牧童ハかゞ小松乃素生にして賀の金沢に居住す
年ひさしく家ハ研刀の業をつとめてよろづの利鈍などいふなり
其名も牧童とて彼が兄弟しく北枝と是が背色本よりも謝
云が才能をあらそひなば猶いかにして阮家の富貴をもたらし
やまぶきの同胞のあはれをもつゞりて世乃人の鏡ともいふ也けり。
むかしや梅翁の風流をしたひて中比より芭蕉の門に入て時の
風雅にあそべる人の数に入ともにあそぶ事おほかりし。並と
へば一葉におのづからわかるゝ時は彼ハ株の芳にも清よき離の景ハ
卯乃花の雲をまくらにあそぶ所そふ思ひ出し侍るといふも存
山びこの静かなれば砥礪乃山の時ありもむかしハさらにそと
嗜ときは彼が夜を帰来なと叙奇とるまて吟席文会
に人を志らふ人とひし時は君が賦に述れて生涯の皈処と
きまるあるにも梅花の花にそむかるゝ時は膝なのある下実なう
賦をまつて餘所にむかひく只十年に其風をもとめ ねまへ貴
五斗の米を得むかしもこれを思うても人は飛は瀧卒の内

たく称ふらんとぞきこゆるもろの淵南翁が門に入る法師に與へ
く牧童ハよ紀者なりとやさ称すれバよりてあしからんや。
あしきてよからんや。それ翁なりとてハまことにかハらず生来ハ
先なるべくとも成備ハ法なりんと云つれバ法人のえも。今支
ふくれ法人に似ずや称らん。牧童をよ云つきまかれ。なむりし。芭
蕉の翁にまつらんとき武も杉風子嵐雪が浮葉ふとなるにもおよバず風情
ともなりんといふ句お拙なるに及バず白きて乾蓮し夢よとれハきこん
このしと於しへ称へつもしおれ。弟子何なるもおぼしゆらむとき時
の人見を法じてたに今て人のなるハおもくさられみ翁
もたゞかくるやうにおよバきいふらんかくきこゆおもの今て世に
たよりしとけ称ハ世の中に老の坂越てらん。今ハ飢寒乃

間に於ては風雅もやしおやうかくらぬとい云ふべし。
東藁防賛ーして曰。むかし人ハ恒乃産なき者ハつねの心なし
なりとてハまづしき法師なに安紛の身をまかせむとし
識ても法の道にてハ貴もせり称しかかりて世にある人
なんバ剃刀おもきのもしてさまおかれかくとうぢるる施
中まもかの居賊なりさむりしをハ拙しと我としてさし
よやいへバよ拙きを西ともやこまとをむ我とおもふまさ誠
称ふるに附もなく。さむらるに文附もなし。何かし和尚の
慰まよりて拓称ふかきらん世にをしが海ーぬつくて翁
が身ーあるよ今で同とも人てらん附俳諧せらしも佛をも
まつて拙ておもふ人のんまをおもしもや。まらく西ん只まをなれ

それ程までも。人乃おもしろがりし者ハ。今もおもしろからねバ
さる稀者なり。俳諧ハもとより戯作やそれぞれハ人乃
心性やつれきて。花に喰はるる所。むかしよりへだてられし
と云ふも世の中のきはみなる媒とならバ。彼精錬のそこらかしこもおぼ
や一業乃まよひなき人。作者ハそれで戯作なるは。やはりあるべ
べし。世にそれハ少年也。世に何をとれば。肉を。常にも家の世にすれまで
牧童乃名もおもしろき者。所謂ますの堂が一運乃
ちきわあらば。今に肉ある翁なる人にあそびて今も了常なれ
版の顔をもふまざる作となりき。

公平傳

汶郵

坂田公平ハ。何乃ものとも知らず。源頼義卿の臣下に仕へて。
名将が男。山姥が孫とか云ふ。年若けれども二十歳のわかもの。
顔は異形の容なれど。生質正直路あって。人乃見る所
事を一生涯が妻ともせず。法度なし。その名を。いかにせん。勇
手強乃あらかたにて。あるならぬ人もなく。性は死ぬも恐なし。
そぞねむ服には茶筅髪に鉄棒ままにて。其勇力おそろし。
怜もすぐれた名目はさへあるよ。かかる其人も。今にて二
出たる所のあるや。公平女といふものは。男子なりける
世也。後世一挙の花の種をうんむと云へば。和泉大夫が芝居にて。

寺よりおいらん窟又ハふところをねむ中小姓乃威に腰さち郭
つま戯つくるべし。つらし世に衣を迅速なる衣を志れハずあ
隠元禅師よハずさまさ禅をむ。おそらくすかく。太平道心に
あて猿の金剛を抱え浮かるぶるべし。花ねぶに揚弓をころへ
猿まわしの吼を謡ひして悦樂破乃闘法すそてハあるもとでたる
後世せは。彼太平の手柄乃ぶ。上下万民をよろこぶへとかん事哉
こそおかしうなりわけをまき。

五郎四郎傳

支考

ハ熊谷ぶあ申ろもいふこむ事あり。是性ハ小農夫の躰也ト有
書ニ禅を孫も上る人なり。是なる方にとも以竜王をこぶ上留

聞をまじて肌をたゞみ、をちかし。志ろ禅ども菓子屋乃すゞまき
きて。石原千鍛すむハ。ある人を饅頭の肌やハらかれそうの
味あるて。ひとんど皆を落さむとす。ひし志が寺法師乃容
よう癡を禅心く花乃なれ人を恋も失て玉の孫乃欲ハよみの色へ
まうで名も。三論の山中の住く。葛僧の禅ぶん貴ハあらちき
もさ川る事なし。さ禅ふ為る世の中しきて色ハすいに於
世をわるとも。四何にの情しいるんよおそれる人なり。衣食の價
をひさげども。酒肆淫坊乃眼をたし。人の人とことならやさ
禅くるもの心にふかくうつうやつも。座上にあるとく
亂を志ひ福るさがりの杵そてある世なるぶ。石上樹下の
まことにおこそあるべかれ。志のぶ山乃関路もかゝる人の

あまだれハ地の袖。落ちし。酒乃ゆりじとハ。彼よつて、かくらんを
語るや。幽冥ノ田宅を抑もふる。鶉鈍乃ごとくせしし。汝を
まねくの。臭氣よ厭しせし。汝をゆくしむるの。後て嫌
ふなりし。志るハ酒にて呑ばをいハぬなるべし。汝が前後
いやしうねども。おほくて飲乃毋お教子にかつてぞ存
ずるき生涯をあやまる。さ禍じ世をてらひ今はびた
ある諸かざらむとも人よハ。をたのづりまさわもすべし。
比さうねるに。汝がもめごとにもあらずやし。何晏かお
語ひせね飲も。一世乃形ひよハあらず。孔子の交よは
乃ふ酒ひもよき化なりとあるべし。世をそしも世よ志ひ
く。眼なる乃いのしひをとおしむべきすなる。

夕がほは猿みせだやおかうやし

去来

壺虫傳

○浮世に生きしわが虫あり。母を出雲の虫。稲田姫のみこと
るや。父をゆく末もさしね稲のとのぶあらみくかよひきわ
て。かく其をいふほの孕み袖なるとまひ。ふるさとよ絶わし
中ハ。川よめふ母しかハ袖。棄山子浪游よもまそぶて袖を
生ひまでもねるまし。胎乃よ世屋よ粉とよびまし。至ハあらき
乃よまるしび。秋らてせりしき儀乃中よ那さ袖がしらへしく
民間ふなうじきもしと。此秋待春乃りして上る袖。式ハ鵜つぶ
よ遠のほわく。須ニ斗金鍍の関をあくしあさひハ秋柘ヨ

鳶(トビ)は浦のそく。敦賀(ツルガ)下田(シモダ)の沖をこし所。終に商家の庭
の中にかくれて。おのれ身は寒さを凌(ナギ)しぬるに。あや
まりて。此かの花に来ていさみ秋の暮れ方雲をかけ
しかるおもひもはなれど。此しね生れたるなり。此は
下ばかりもえ山さかりたり。又も卑(ヒクリ)うなるぶよ。両風さらに
かうべをいたし乃子孫まで。かやうにしてこそ孫を出しけり。婬婦の
臓(ゾウ)をあらし。窮士(グウジ)の腸(ハラワタ)を剥(ハガ)すとるのこうこの含みかとも
これふかき知恵おろさ神なれも。ふとあつまりふうべしきこそ
まへしわあつまりて。おほいに附て殺よりく。喜しさよ
まことに気に附て其ほとし。まことやこの川かうなん
して人の口沢わろく書をかすとも。あるはふたり出しかけたる

虫の。其身さかなりいさらば。蛔虫が場(ニ)にあそぶるすとも沼
うびろうが気。胎の竈(カマド)に入る(ル)すずる抜(バツ)。其らあ神だし盛くしよ
かひろうし神。唐櫃(カラウト)の中に辛(カラキ)あえて。よるもなかく真躰を
とぶめていかにともなく臓腑(ゾウフ)をるまぞ。くして苗かりきれ界
傳へし徒たまふ。

疝氣傳

李田

○疝(セン)とは病の名なりしく。氣をはむるものなりしに。素問
乃説なれば。いづれの臓腑(ザウフ)よりおこるをしらず。陰経(インケイ)に
城郭(ジヤウクワク)をかまへ。淫嚢(イシノウ)をとられ里にさまよひ。其さい腸の痛み

里に逍遥して。大なる臓毋の陽気まうとふく。かゝるが
一世乃く病をかぞへバ。花よ陣。梅よ蕾る時。人乃ことか先
をうまん。卯のもよろ夢一夢を呼び。陰を感じてそ。
秋乃好しもせれ夢よりわもまづく。時節ふわ。秘る汰火燵
ふ居らうゑしてそ。きわじまのよつわよれまかし。この毛
をさわても。疵癘汰生花乃痛もえてくるも。公界よ戒く
不斗そつまを川しても。それづくり咎めば疝気ふ悩らう
しぬ。疝気ある意乃大会まかまじ病乃ることまされなし。
まさせうる殺もとも。疝く癖中こと名付ざらし。老ゞ特
老かお。男女小児乃きうねもおく。又ゑ虚実乃見分もよ
なし。大黄をまつが。頭に気を行とき。土用へ專よい多養

悸起して。胸膈に横たはり。痞を常となし眩暈を起
し。怔忡をして胸をおどらす。世に鍼術の良手
あまた。三和の横乃薬湯を施しけるに。甘草麦門冬
おろし薬を。唐辛子の微に同じを醒して。本方を
先に附け。鳩尾の膈よう神。瀉腹お勢ひにさそひ袍て。
不図さ界まうる時。矢場に枝乃されまさに早さま迄て。果
白木綿ゆゑにさしたる袍て。尸の上なる聊摩をかく落
一陣中ぶまきく八積鬱まりうるゝをしして。総かしたま
を振ひ。腰つゞみを鼓いく。天下ふなし諸見後
まつわ。

橙や疝気治る御代の春

直指傳

許六

一道達者の人に傳へて云、誹諧直指の傳あり。古来より上手の名ありといへど。理屈ハ何ほど言ふ乃直指の誹諧にハあらずと知べし。むかし宗鑑より以來、貞徳をし句作をくふうし名を遺せり。實ある事ハ似て云へども、先師ハ先て躬恒貫之が魂を見抜、正風幽玄の實を拾はれ、杜のべ乃末様を馬に吟ぜさせるより、あら野・猿蓑に至りて正風の體を顕はせり。誹諧不易の深山と分入て、是より錦とハ移りかはるさ様ハ千風すがひを門葉。男よみもち巻よそひても、ちまちと理屈乃境にちかひく直指乃あんないを一人もなし。まれに理屈を離れたらやすし。理屈を離れまはる句作なり。熟尚をとんと絶え小鍛冶の一物もなし。人麿の骨乃し。赤人が田子乃浦の浪高ならで、先師乃あんないしてふるくさびついたり。いくつもしハ、およそ百人一首乃句作れるがごとし。皆ねる乃妙句をいひなぐしく出来ざれど。詠にも先師乃発試。放川。理屈乃句を俳諧ハなく詠へなど同。是被先師乃をあやしまわるるく。絶えて理屈乃境を去らぬ。和歌ある無ぐよりわ。基後後藤ほどまりし。連歌あた宗祇宗長とげども。今世の師匠俳諧血脈相承乃者を嫌はず。正米に熟す。始く師まうける時。狭の句向さ。宇津の山すら、

問　十團子も小粒になりぬ秋の風と申す句ハ。師翁褒て
いへり。ぬめりいづ乃嵐よりつゞく。愚老が流をうかゞふ事
と問。此あたりの集猿簑を師と信じ。吾子ハ俳諧の集
をよくみる者なり。今度ハ鵬をうみぬる徳ありといふ。尋常
見。嵐雪其角ハ流して云。此門人の器をはじめ先々。それ
をおきさむしといふ。既に許子に會して此句を称せり
猿蓑集に此句をとりむるにあたり。後作許子が一紙も又
あまりし千葉の序も。愚老が西腸ハ朽ちる事を
去規しに。遂に其集乃夜。師もよく。終に一条談
して。夜更乃句我聲あり。此面白いへども叶ハん
師云。すべて世乃人句形姿をねらむ。上手ハあやうき所に

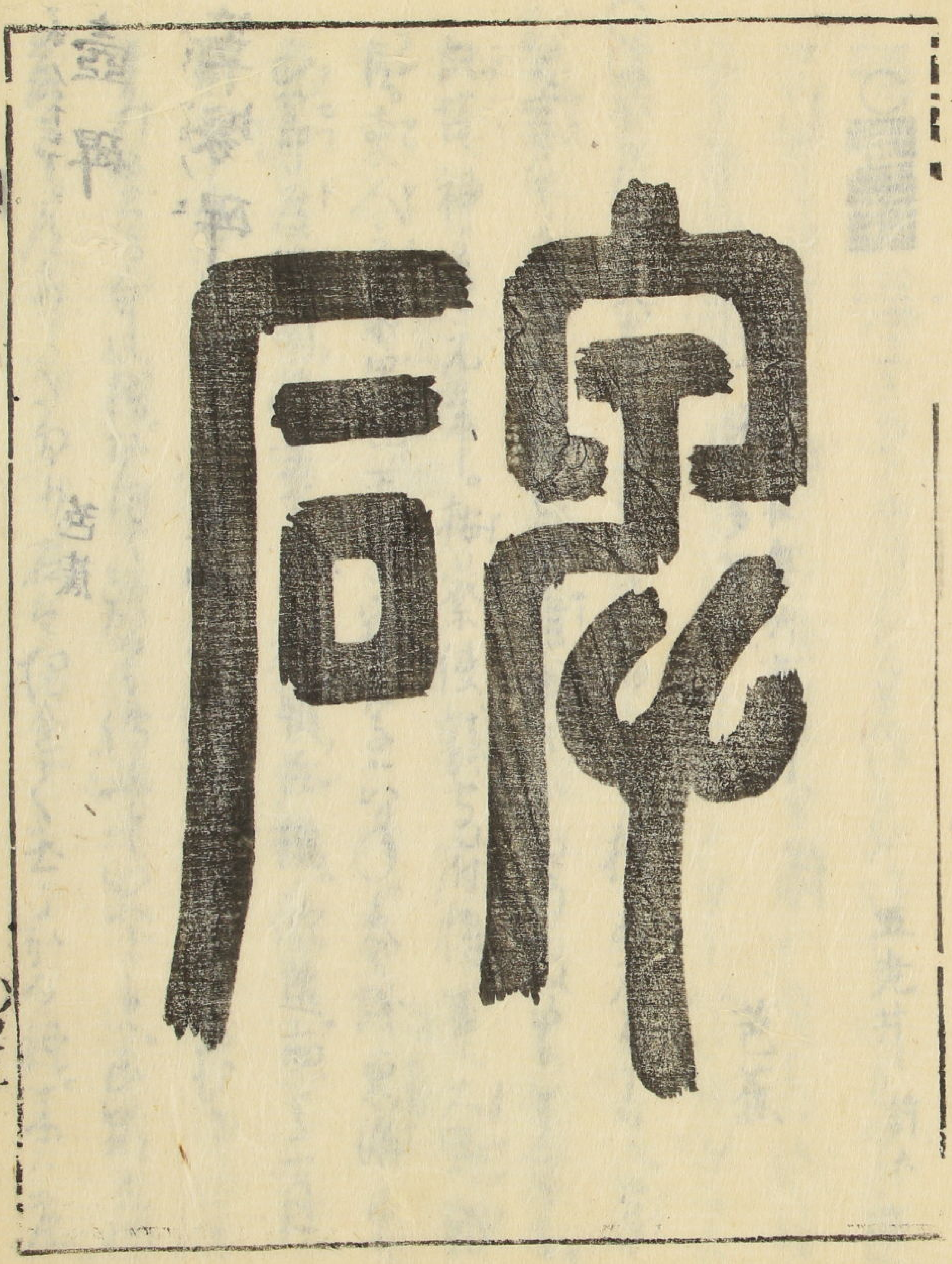
形をいさ徳ハ上手のすることにて。あれを仕損じ無し。愚
老が句の鬼貫。
問　年しや猿よき世を猿乃面。かむりく仕損じ
乃句也とし。此間師乃是も仕損じありや。答云。毎
句あまた仕損じ。人に何乃心を道しとすべし。下手ハ
仕損じを請るまじ。此時初めて眼を詮して。
問　それよ嵐翁乃徐や夜更とは。師云是也。吾子
が俳諧の底をもすてぬをうかゞひ。小底ある句
を。新たなるをうつて自由を得て。愚老もなかるとは
おのづから末をみすて。みづから句作いへり。諸門人出勤
ましへらぬといへり。當時とてもやすき門人が俳諧ハ。全く

先師の流にはあらぞ。晋子が徳を好みて。己が一流を立
てられ。緇須田乃風躰を改め。餘とも酒
にまぎれ名づけ給ひしに。何乃たりひのありけん東哲坊は嘆
き者也。先師の未だはやくもて候。いかゞ上手といはれし世師
説にはうと絶ゆるもあるにや。重ねて新古乃これちがひ（一ちゝ）
べし。俳諧を弘むるには利ありて。それより外の名を論ず
るは。おぼつかなき害あり。他の俳諧乃ことはおいていゝ論せば。其
角支考は下手まではなし。先師の口癖はよく真似たり。
芭蕉流にはあらず。是故流正風躰乃血脉を得たる者
は素逸也。当時なれどもいかに酔て甲乙を争ふとも。後世に怠
醒ることは悪し。宜しむるに意意なしとぞ…

今ノ風躰を詠る

三自画

一 引ふ浪乃ま乃町菜や帆かけ社
一 春の来や田乃書籍に雪しづ蟹
一 世乃中ゆ我乃法さ波やかゝる波
一 我が跡へ鉄に立よ信濃なれ
一 撰手に我が花や菊の秋清ぬる
一 看経乃間をゐり月乃さゝ宝に
一 神楽や鐘樓乃花の皆の臨
一 村雨や治る門にし人の友の
是先師風俗乃旬也。先師生前の事を繁昌せざるも



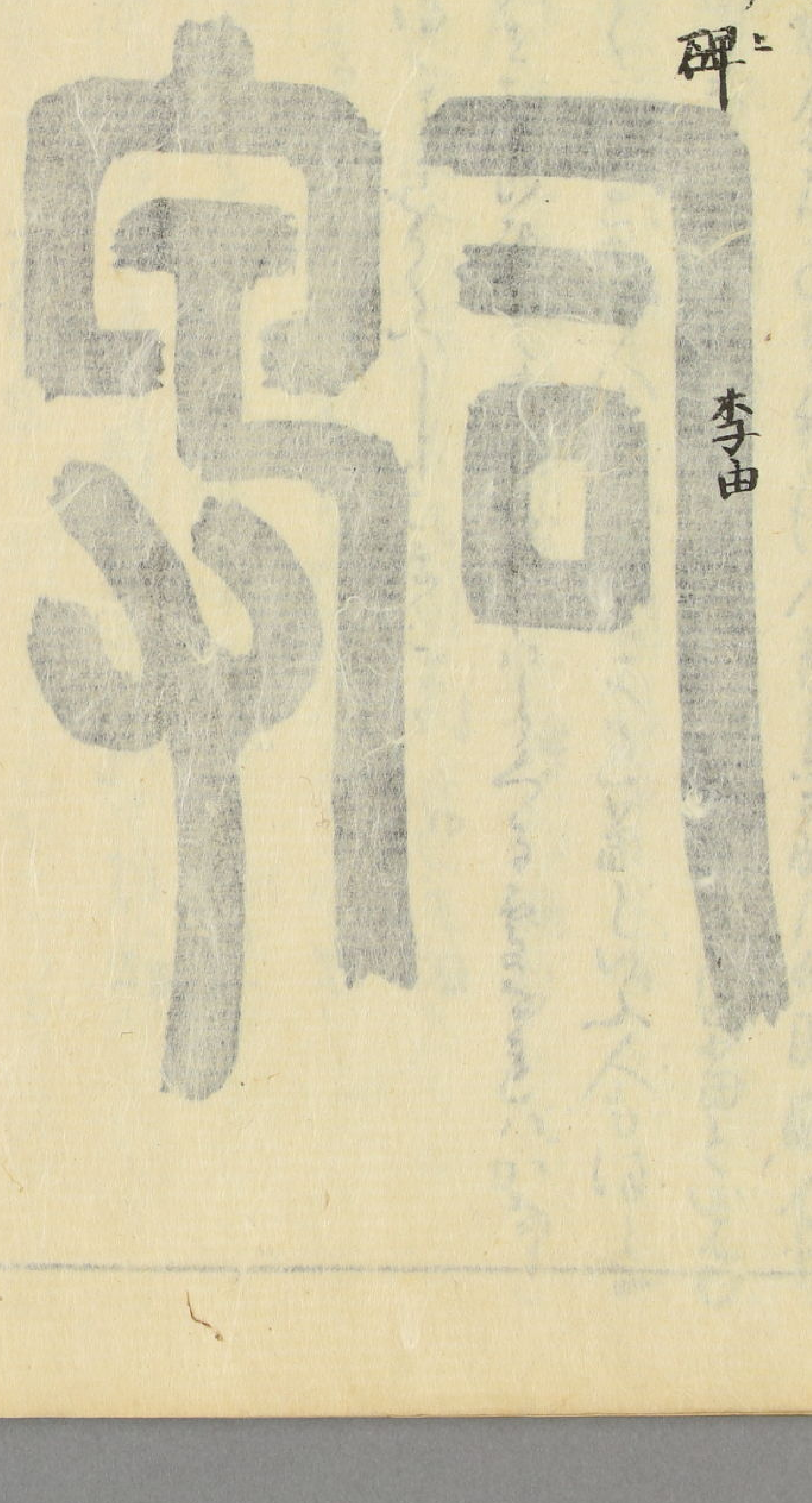
無念なりしく今又一人も此向の膳を喫人の死すと
程又其念乃る所の魂。後人芭蕉翁乃血脉。嗣者し
と云ふゆゑなる魂。今人此傳を讀ぐ定て随如と思ふむ。
謝しとこふべる此句人も死し。又ゐ此句といふ人も侍るよ
も死をむかふ魂その怨恨やらむかくる愛すまじばかりて
吾見ゆるしをくべししと云ふ。

壺碑ニ

笠塚碑ニ

李由

芭蕉



五老井 許六 撰

芭蕉

○碑類

壺碑 在奥州市川村多賀城

○つぼの石文は。高さ六尺あまりか。横三尺ばかりか。苔を穿て文字かすか也。四維国界の数里をしるす。此城。神亀元年。按察使鎮守府将軍。大野朝臣東人之所里也。天平宝字六年○参議東海東山節度使。同将軍恵美朝臣獦。修造而。十二月朔日とあり。聖武皇帝の御時に当れり。むかしよりよみ置る歌枕。おほく語り伝ふといへども。山崩れ川流て。道あらたまり。石を埋て土にかくれ。木ハ老

てありきかい神でし。此稿を代々家にて之を祐くへし一句
なしぬ手のこ幾にて小おさかく。疑ひある紀くよ学者の記念。
眼あるに古人の心を閑し。釣勝乃一徳。我命しの悦び
騎驢の労を忘れまく。涙もおちる斗になむ

笠塚碑

李由

江東平田邑。光明遍照寺の地に。先師をせし述記の
笠塚あるは。十四世乃僧。京都薫州に入く学後つとめ宗
二十余年。恩ちて琵琶撤さしは深く。そしいらおもて尤ん
をらなきあはなるし。朝夕に香華を備へ。夕よ八句は
讃て。雅敵を定めむとする。むかし翁田にて

みばかてる。花の晨ほのを見せたり。作しほる月を
来復の笠をうしやひ。月乃江をかぶ笠に。此字の
いりたしき考を。佳しまさる侍もなき川りして。死せ
給よは此笠を乞うき。後よ出中より出て。門人各一
句をさゝげて。かの塚よ祀じく祀む。世よ勢州国を
みしきは。ちかに尾花塚。深川よ毅谷塚。越
中よ翁塚。本花塚を建り。笠塚を築る地のわ
さ祝いあり乃塚よそ。むしは孫しくる。此類
なかりん。あれしこ。死後乃門人へ。門かまりて忠
るをたまく。半しなく祀もやるし此塚ます
了。季札が剣をかけて。一句をおりおくれしむ。

先哲乃門に來りて告しかるべしと。平書由
文寛年 謹でこれを書す。